

武德編年集成

四十一  
四十二

見

庫	文	閣	内
四九函	三三架	三三九號	和書類
		五冊	

(八冊)



内閣文庫	
番號	和 33119
冊數	50 ( 28)
函號	149 113



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



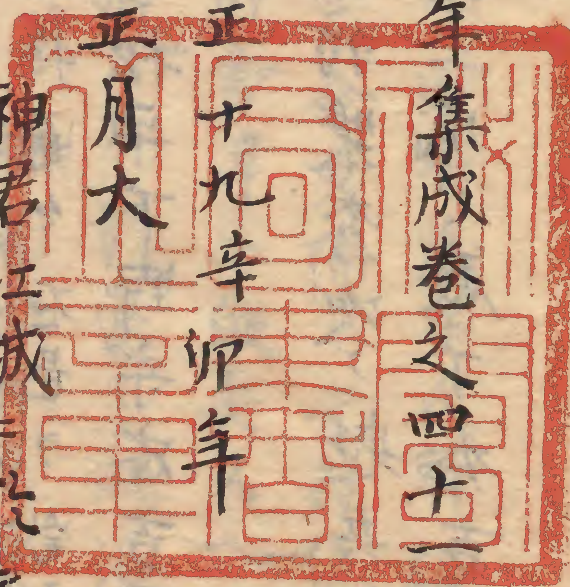
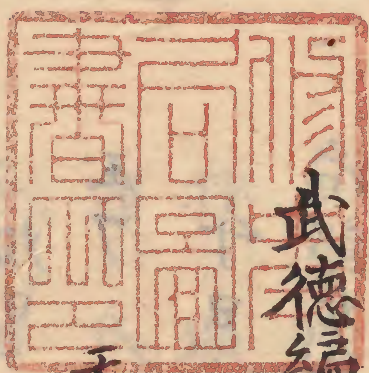
© Kodak, 2007 TM: Kodak





陶 158

武德編年集成卷之四十一



天正十九年 卯年

正月大

朔日 神君江城ニ於テ始テ歳旦ヲ祝フキ玉

群臣悉ク参賀シ畢又奥及葛西大崎ノ凶

徒退治トノ羽柴黄門秀次今日尾刈清洲ノ城ヲ

首途スト云ク

二日

神君謡曲ノ始恒例ノ如シ蒲生老驛守

氏郷旧臘ヨリ寓居セシ奥及大崎名生ノ城ヲ登

木村高敦撰



居城會津ニ赴リ  
木村伊勢守秀俊父子及伊達  
ルハ飯  
左京太夫政宗カ家人等ヲ携

五日 奥列ハ御発向トシテ 神君武城ヲ御首

途アリテ行程九里ヲ歴テ岩付ノ城ニ至リ玉フ

先隊ハ榑原式ヲ太甫康政ハ旧冬ヨリ井伊兵部

サ浦直政ハ奥陽ニ本松ニ屯ス

麾下ノ諸將逐々在邑ヲ発ス

九日 松平下野守忠吉君大坂ヨリ 江府ニ飯

玉フ

十日 羽柴秀次ノ魁兵相沢早川ニ著シ石田

治部サ浦三成ハ殿下秀吉ノ命ヲ請テ奥瓦相馬

ニ至ル処旧年蒲生氏郷雄略ニ依テ葛西大崎一

揆ノ城砦余多陥リ木村伊勢守秀俊父子危キヲ

遁レ氏郷會津ハ飯兵スヘキ旨注進アルニ依テ

三成相馬ヨリ引退キ飯洛セントス

十一日 神君岩付ヲ発シ總及古河ノ城ニ至

リ玉フ処ニ氏郷會津ハ飯城スヘキ旨ナルニ

奥瓦ハ雪固タルニ依テ暖氣ヲ得テ殘賊征伐セ

ラルヘシトテ是ヨリ御旗ヲ旋シ玉フ

十三日 岩付ノ城ヨリ 神君江城ハ還入シ

玉フ



十四日 羽柴秀次武臣ノ府ニ至ル 神君彼

地ニ渡脚々評議ノ上是ヨリ秀次兵ヲ班ス

是日 参列固崎ニ於テ御家人一色弥次郎貞

重入道亦運卒ス去年以来病痾ニハ武江ニ来テ

ス其孤子重政僅ニ五七ニノ三匹ニ寓居ス

十九日 神君上洛トメ當廿二日 御祭駕ノ由

觸促サレ且馬醫桑嶋新右衛門仲国ヲ羽取米沢

ニ遣シ伊達政宗早速上京ノ一揆ニ同意ナキ田

陳謝スヘキ旨ヲ告ラレ斤倉小十郎景綱ニ七尊

筒ヲ投メ異見ヲ加ヘラル

廿一日 政宗ハ 神君モ淺野彈正少弼カ密

意ニ忘レ米沢ヲ登シ深雪ヲ凌キ二三日ヲ歴テ

二本松ニ至リ淺野長政ニ謁シ上洛スヘキ旨ヲ

定ス

廿二日 神君御祭駕延滞且 命ニ依テ群臣

登營ス

是日 秀吉ノ連枝大和和泉紀伊總テ三匹ノ

牧從二位行權大納言豊臣秀長逝去 大徳寺ノ塔  
中大光院ニ

葬其子ナキニハ羽柴秀次ノ弟秀俊ヲ以テ嗣ト

シ三匹ノ牧タリ 秀俊無双ノ悪人ニノ文禄三乙  
未年和取西河ノ瀧ヲ遊覽ノ時



横死

廿五日 武陽ニ於テ三尺碧海郡登賀利村ノ  
産深津四帝兵正利率ス

廿七日 蒲生氏郷會津ヲ登シ洛陽ニ赴ク

廿八日 茶道ノ宗匠千利休宗易カ罪ヲ称シ

秀吉ヨリ死ニ賜ル其首ヲ梟セラル其男女ノ子

尼皆辺土ニ隠ル世ニ称スル処ハ利休潔白ノ人

傑タリ秀吉柴カ娘ノ色ニ耽リ罪ニ陥シテ妻ニ

是ヲ殺サルト云々然レモ利休モ奢ノ至リ洛外

仁和寺ノ西田中ニアリシ 光孝天皇ノ陵ノ御

石塔ヲ侵シ取テ已カ茶亭ノ庭ニ迂シ中間ヲ竈

彫テ燈籠トス是ヲモ忍フヘクシハ孰ヲカ忍ヘ

カラサランヤ是ヲ以テ考ルニ秀吉ノ怒リハ頃

年利休茶器ノ新舊真贋ヲ檢定シ價ヲ致ラ決ス

ルノ処近來親疎好惡ノ故ヲ以テ或ハ新シ以テ

旧トシ真ヲ以テ贋トシ枉テ共ニ價ヲ高トシテ屢

人ヲ論ス殊ニ大徳寺古溪和尚宗陳ト相議シテ

已カ木像ヲ彫刻ノ剝ハ平木履ヲハカセ山門ノ

構ニ置ク彼門ハ親王携関モ往及セラレ処ニ奢

侈狼藉ノ超過ナリトテ誅セラレト 光孝帝ノ



脚對ナルヘシ且秀吉ノ命ニ依テ前田利家細川  
忠奥從善院玄以崇大徳寺ニ至ル 神君モ後御  
アリ古溪寺ノ碩学教輩ヲ召テ木像擣上ニ置ク  
故ヲ糾断アリテ時古溪潛ニ懷劔ヲ法衣ノ下ニ  
隠シ陳謝ニ堪サレハ自ツカラ咽ヲ貫キ  
死ナシト歎シ辞氣最壯シニメ再三ノ問訊ニ敢  
テ辱セス鮮カニ申シ用カントス其時 神君其  
豪壯ヲ感シ且大徳寺破却ノ一ヲ憐レシ玉ヒ徳  
善院ニ歸リ宣シク歎訥スヘキ旨命アリ爰ニ於  
テ古溪屢徳善院ヲ以テ淳屠ノ境涯俗礼ニ疎ク

慮ラスシテ彼木像ヲ擣上ニ置ク一説ニ佛法破滅  
ノ時刻到来タルモノカ偏ニ殿下ノ恩惠仰ク外  
無他ノミナリト陳謝シケレハ秀吉怒リ解テ大  
徳寺禱ヲ免ルト云シ

○利休が長子道安初号二男女菴号宗娘一人  
後ニ赦メ於テ飯京ス少菴カ嫡子宗且洛陽ニ  
任ス其子宗左紀別候ニ仕フ少菴ニ男宗守ハ  
讃忍高松ニ任シ三男宗室ハ加列ニ遊ヒ後豫  
凡松山ニ任シテ家名茶道ヲ以テ世ニ鳴ル或  
ハ紙屋宗且ト云フ筑凡博多ノ富家始利休ト



共ニ普通国師ヲ仰トシ後利休ヨリ其蒞奥ヲ傳ヘリ

○諸国一統ニ喫茶ノ會ヲ嗜ム如後主計既清正肥忍ヨリ参勤シ本国寺ノ内親持院ニ止宿スル間日々ニ茶客ヲ請ル所ニ山科元慶寺ニアリ僧正遍昭石塔ヲ庭ニ迂シ燈臺トス今ニ觀持院ニアリ清正直ノ士ト云ヘ是ノ不学ノ害歎其子孫断絶スルト又宜ナリ蓋當時利休カ傳ヲ得テ世ニ鳴ルハ蒲生氏郷細川忠真古田織ア正重然瀬田掃部伊勢彦或ハ芝山監物ナリ細川ハ武器ノ好制

モ又秀逸人ノ世ニ是ヲ宗フ

因正月小

○三日 神君武江ヲ御登駕ト云ク

○十三日 蒲生氏郷入洛ス秀吉對顔メ曰汝奥羽ノ藩領トシ武備懈ラサルニハ葛西大崎ノ逆賊大抵敗績シ本村父子カ危殆ヲ遁ル實ニ其功莫大ナリト称美セラレ本村カ吏ヲ擢シ法ヲ正シ民ヲ禦スルトアタハサルヲ譴責シ其祿ヲ没収セラレ然レモ氏郷類リニ歎訴シ伊勢守ヲ以テ家臣ニ列セシメ僅ニ五万石ヲ授ク



○廿五日 神君御入洛アリテ去秋関八取ヲ封  
セラルトテ謝シ玉フ

○廿六日 神君ヲ誘引シ秀吉尾取清洲ニ放鷹  
セラル伊達政宗爰ニ到恙ス 神君兼テ梁カ銳  
武ヲ愛シ憐愍ヲ垂玉ニ今度柳原康政ニ命シ政  
宗ヲ携ヘ登セ玉フ康政則清洲ニテ富田左近將  
監知倍津田隼人正ニ扱テ政宗カ罪ヲ償ハント  
ス秀吉實ニ政宗カ逆謀ヲ知玉フト云ヘテ  
神君ノ哀憐シ玉フニ依テ點止カタクシテ福原  
右馬女直高木下半助ヲ政宗カ清洲ノ旅營ニ赴

カシメ改宗千里ヲ遠シトセス早速馳登ルトテ  
鷹取セラル干時富田左近將監ハ察スル処改宗虎  
狼ノ心アリテ葛西大崎ノ士民ヲ募リ一揆ヲ發  
サシムルニ於テハ如斯忽上京スヘカラス實ニ  
叛クトナキニ迅速ニ上洛スル須偏ニ公ノ播  
瓦ニ在ス時信長公ハ諛者アリシカモ不日ニ安  
土ヘ馳登リ玉フヲ以テ其疑ヲ散セラル先蹤ニ  
均シカラスヤト云フ秀吉唯諾セラル此旨氏郷  
傳ヘ聞テ其政宗ヲ荷擔スルトテ憤テ富田ト交  
リテ絶ケルカ後故アリテ和融ニ再芝蘭ノ契ヲ



遂にト云々

○廿七日 羽柴黄門秀次清洲ノ居城ニテ政宗  
向顔シ是ヲ享ス

○廿八日 政宗今日清洲ヲ祭ス秀次沢次傳言  
等ノ一ヲ丁寧ニ汝汰ス 或ハ政宗二月廿一日天  
ト云ハ 沃ノ城ヲ祭シ洛ニ赴ク  
非也

二月大

二日 政宗礮柱ヲ金箔ヲ以テ濃サセ再ニ飯  
国ノ志ナキヲ頭ハレ是ヲ馬前ニ持セ洛ニ入  
ル觀ル者驚テ往古ヨリ 朝敵タル人降参スト云

フ氏如地死リ輕シノ志ヲ辱セサル者ハアルハ  
カラスト稱譽セシム 政宗妙覺寺ヲ以テ宿館ト  
ス

○六日 神君清例ニ於テ秀吉ト是ニ所々放鷹  
シ玉フ

○十一日 羽柴中納言秀次正二位權大納言ニ  
任叙ス

○十五日 秀吉飯洛 神君是ニ御上京アリ然  
ルニ勅使勸修寺權大納言晴豊来臨 勅作ノ薰  
物是ヲ賜ハリ且 鳳閣櫻花盛リ夕几間参 内



ヲ返ラルヘキ旨ヲ述ル 神君忽ニ禁中ニ参リ  
玉ヒ 綸命ヲ拜謝セラル

○岡野家傳ニ江雪舟カ子平兵出房恒洛陽ニ  
旅テ 神君ニ拜謁シ御家人ニ列スト云々

○頃日ニ秀吉ノ命ニ依テ蒲生家ヨリハ訥入山  
津田ハ名出シ出シ伊達家ヨリハ午腰内膳ヲ出  
シ對受アラシム 政宗カ臣茂庭石兄ハ午腰ヲ真  
紅ノ鷹ノ大縮ニテ繋キ是ヲ携ヘ出ケルカ内膳  
ニ諭シケルハ汝此度分明ニ白状セハ人質ニ取  
置汝カニ族ヲ罪スヘキ間政宗一揆ニ同意ノト

述ヘカラスト 教訓スルユヘ對受再三ニ及フト  
云ヘ尼落着スルニ至ラス其後氏々ヨリ山津田  
カ奪取タル一揆方ヘノ政宗カ廻文ヲ出ス政宗  
披見シ手ヲ拍テ是山津田カ謀書ニ政宗知弱ノ時ヨ  
リ救年芦名盛氏ノ筆跡ヲ学ヘリ 山津田モ帛ニ  
匿近シ同シク是ヲ習フユヘ謀書ニ抱押モ虎哉  
和尚ノ族ニテ知雅ヨリ鶴鶴ノ取ヲナスユヘ是  
ヲ以スレヒ愚痴ニ八月ノ上中下旬ニ依テ鳥ノ  
眼筆法違フ間諸家ニ遣ス文書ヲ以テ吟味セラ  
ルヘシト陳謝ス則余多政宗カ書牒ヲ集メ紀サ



ル、処果メ廻文ノ翔相違ニケレハ山津田カ謀  
書ニ没断アリテ政宗罪ヲ遁シ聚乐ハ登城ヲ許  
サレ今度ハ穩便至極ニノ從者僅ニテ上京セシ  
エハ登營ノ時カヲ斤倉ニ持セ草履ヲ平田五郎  
ニ取セ且政宗死ヲ賜ハテ欵ト小刺カシ懷中  
シ命ヲ鴻毛ニ比シテ秀吉ハ謁スル処息喚淺カ  
ラス不日ニ下向シ葛西大崎一揆ノ殘黨ヲ亡ス  
ヘキ旨ヲ諭サル其退出ノ間平田玄園ニテキ行居シ  
ケルカ斤倉ヲ以テ玄園ノ柱ヲアケテ其力量ヲ  
野スト云々井伊直政 神君ニ謂テ曰去冬二本

松ニ至リ政宗カトヲ委シク尋聞処ニ謀叛必定  
ニノ其證歴然タルニ秀吉ノ赦免ハ純明ノ足ラ  
サル処歟 神君ノ仰ニ秀吉實ニ彼逆意ヲ知玉  
ハ厄弟一ハ 政宗早ク上洛スルノ豪放闊達ヲ感  
セテ兄弟ニハ廻文ヲ一々躬ツカラテ写シ之ニ却  
テ正書ニアラサルヲ申披クテ不歎至極也弟  
三兼テヨリ鶴鶴ノ眼ニ心ヲ用エルヲ以テ今度  
證拠ノ廻文実正タリト云ハ厄是ヲ以テ申披ク  
テ遠キ慮アリテ勇智氣備ス此三ツノ内一事モ  
常人ノ及ヘキニ非サルニハ罪ヲ免許アル秀吉



ノ大度ハ政宗ニ又百倍スル由 鉤命アリ後年  
秀吉施牙院全宗ニ宣ヒケルハ政宗カ罪我能是  
ヲ知ルト云ハ凡才一三韓征伐ヲ心掛集カ如キ  
勇者ハ助ケ置テ功ヲナサシメシムル爲ニ政宗  
ヲ殺サハ鎮西ノ嶋津中国ノ毛利四国人長曾我  
部ホ疑フ生シ害心ヲ起サシメ西段ヲ思惟ニ態  
ト罪ヲ糺シ遂サリシ由語玉フト云シ

廿二日 江原八幡山ノ城主正五位下行侍從  
重隱岐守坂原朝臣信宗卒去享年六十四於尾張鷲津  
令戰死飯尾近江守定宗カ長男母ハ細川晴元ノ

娘ナリ

三月小

○十三日 前田筑前守利家于時号羽策参議ニ任ス

先發上洛ノ別有ノ對向中以去ノ於園系松  
板ハ五ノ中ノ一物九人前中あり深クニ私  
アハムト云フ事相ニ任任中ハケニ山崎可  
有モトク信守中ハ名面中ノ時中ノ事

三ノ事  
百景流前書



四月小

三日 神君洛ヲ登シ飯路ニ卦カセラレ

十三日 利家ノ娘淳田秀家ノ室矢怪ニ侵サレ

惱乱ス秀吉彼館ニ未臨老狐ノ所為タル由ヲ聞

玉ト一筒ヲ箱荷ノ祠堂ニ投セラレ

信家等おあまの所居物と云お見免角狐

不為あまの所居物と云今おあまの所居物

以ておあまの所居物と云おあまの所居物

おあまの所居物と云おあまの所居物

おあまの所居物と云おあまの所居物

迷之津去りてあまの所居物と云おあまの所居物

あまの所居物

あまの所居物

爰ニ於テ彼室ノ邪痛忽平愈スト云

廿一日 夜亥ノ刻 神君江府へ御帰城アリ

是月 北条氏直ヲ河尻天野ヨリ泉列塚津ノ

奥忘寺ニ遷サル炭程ナク秀吉大坂へ氏直ヲ招

キ織田信雄ノ旧館ヲ授ケ一萬石ヲ賜フ且北條

義濃守氏規カ勇烈ヲ感シ七千石ヲ授テ其子久

太郎氏信ニ三千石ヲ与フ成田下総守氏長ニ野

尻馬山ノ城地三萬石ヲ授ケラレ



五月大

十七日 近臣加藤又三郎正次後改茂武石角

澤村二百石ヲ賜フ是ハ三石合數ノ  
不村ノ代地ナリ

旧冬以来東奥葛西羽衣庄内等ニ一揆勃興セ

シカハ去年恩許ヲ蒙リテ南部信直ニ降タリシ

九戸修理政實再ヒ叛逆ノ彼凶徒ト調畧シ已ニ

与セシ久慈備前櫛引河内大湯四郎左衛門七戸

為三郎一戸旧書姉帯大守大里玄蕃等ヲ催シ所

々ノ城砦ニ籠置近境ヲ侵畧ス殊ニ和賀稗貫ノ

地下人政實カ下知ラヘテ島屋崎ノ城ヲ攻ル丁

救回當城ニハ去年檢地終リ月迫ノ以ヨリ淺野

彈正少弼長政カ臣淺野庄左衛門ヲ籠置既ニ守

テシムル処ナレハ南部信直不日ニ後援セシ又

ハ一揆困ヲ解テ退散ス斯テ信濃守信直ハ庄左

衛門ヲ携フ糶夫郡芦沢ノ城ニ籠置一旦三戸ハ

軍ヲ班ス又一戸ノ城ニハ利直カ臣北主馬秀愛

籠リケル如櫛引河内七戸彦三郎等彼地ノ民

等ヲ味方ニ引入夜攻ニナスト云ハ尼北主馬驍

戰メ敵ヲ追払ヒ此旨三戸ハ注進セシカハ信直

則北孫左衛門直愛ニ兵ヲ附テ是ヲ救ハシメ其



外三戸郡外馬<sup>マ</sup>別ノ城六戸郡將法寺ノ城ヲモ凶  
徒攻勤スノ聞ハアルユヘ援兵ヲ遣シ其身三戸  
月館ノ城ニ在テ尚四戸ニ旗ヲ進メ嶋表ノ敵城  
ヲハ八戸弥六節ヲ以テ攻落サセ月館隱岐ヲ以  
テ一戸ノ敵ヲ撃シムト云ヘ凡其臣淨法寺吉田  
福田等敵ニ内応セシカハ微兵ニシ其功ヲ立ル  
ト准シトテ信直其子彦九節利直ヲ京都ニ登セ  
前田利家ニ拠テ九戸搦引等カ逆乱ヲ秀吉ヘ達  
シ援兵ヲ乞フ処ニ秀吉許諾セラレ羽柴大納言  
秀次ヲ首將トシ軍制皆徳川殿ニ任スヘシ淺

野長政坂尾吉晴監軍タルヘシ先鋒ハ則蒲生伊  
達ニ命ス其外東海北陸两道ノ勢ヲ促シ奥羽ノ  
賊徒悉ク根ヲ断葉ヲ枯シテ征伐スヘキ旨令シ  
下シ玉フ爰ニ於テ伊達左京大夫政宗カ罪ヲ宥  
メ且從四位下侍從ニ叙任シ越前守ヲ兼任セシメ  
飯田ノ暇ヲ賜フ干時秀吉密ニ蒲生氏ハニ告テ  
曰旧臘政宗カ奸計吾能察スト云ヘ凡柴忽ニ上  
洛シ不敵ニ陣謝セシメ科ヲ償ハントスルヲ以  
テ予カ愚ニメ知サル軀ヲ以テ是ヲ宥恕スル処  
ハ今般真陽ノ凶徒亡滅セハ是兵革ノ跡荒廢セ







陽ヲ御首途ノ由觸促シ玉フ

廿日 蒲生氏ハ飯田ノ暇ヲ賜リ洛陽ヲ登ス  
秀吉諸將出陣ノ次アリ定ラレ

翼列奥ヲ為所仕至シキ人救軍列ノ次アリ

一者 羽柴信達信俊改宗

二者 羽柴金付大將氏卿

三者 羽柴常陸守氏直

四者 宇都宮氏之節 西條

五者 羽柴越前守氏景

入者 江戸大將云

六者

羽柴尾花大將之次

一 江戸大將之次 尾花大將之次

一 羽柴越前守氏景之次

一 羽柴常陸守氏直之次

一 羽柴宇都宮氏之節之次

一 羽柴西條氏之節之次

一 羽柴氏卿之次

一 羽柴金付大將之次

一 羽柴信俊之次

一 羽柴信達之次







一 古河新田石七千七百石  
日輪寺を造る事  
一 古河石川中河石  
日輪寺領合し因之

合ふ石

石七千七百石  
御出立を以て

石

石七千七百石

石七千七百石

石七千七百石

石七千七百石

大次郎出羽守忠政ニ附属セラレシ御家人久

世宣廣坂部廣勝曾根長一福岡忠光丹羽金十郎  
氏廣渥美羽吉丹羽弥三氏古三先達テ武臣ノ内  
ニテ三百石宛ヲ加恩セラレ、一、大久保長安禮  
牒ヲ投ス

後中流守忠ノ事

一 石七千七百石  
榎田卿

一 石七千七百石  
山中卿

一 石七千七百石  
榎田卿

石七千七百石

古河新田石七千七百石  
日輪寺を造る事



御事申上  
御事申上

卯七月

大正十一年  
田代領

名世之臣

坂本之臣

丹羽之臣

福島の臣

丹羽之臣

丹羽之臣

丹羽之臣

右ノ輩ヲ初大須賀家附屬ノ士遠列ニ在リ時

横須賀衆ト云ヘリ當時忠政ニ從テ総兵ニ任シ

久留里衆ト稱ス元和乙卯年彼銳兵等久世坂

部曾根以下ハ附近ニ福田渥美兩丹羽小笠原松

下ノ氏族紀及南龍院殿上附屬セラレ

遠列大瀬ノ牧野民部成行ハ昔年ヨリ三千石

ヲ領シ 神君ニ仕フ今度岡東ニテ其代地ヲ授

ケラルヘキ如松下加兵出力從中ニテ考吉兼テ

樂ヲ憎マル工ハ 神君成行ヲ管沼定盈ニ屬セ

ラシ其臣ニ准セラレ



十八日 伊達政宗九戸来ノ先鋒トメ米沢ノ  
居城ヲ祭シ白石ニ進ニテ五六日逗留ス

十九日 神君奥列征伐トメ再ヒ江城ヲ御首  
途アリ今宵ハ岩舟ノ城郭ニ屯シ玉ヲ先鋒ハ柳  
原式部太輔康政ニ陣ハ本多中務太輔右衛門之甲  
陽ヨリ去年武陽ニ移ル武河津金等ノ諸士大久  
保治ア大棟忠隣カ部下ニ列メ出陣ス武河ノ士  
ハ當時武  
藏ノ鉢形ヲ堪忍ニ  
料ヲ賜リ在邑ス 神君御門胞ノ連枝松平因播  
守康元騎士百五十 雜卒千余ヲ率テ先隊ニ列シ  
ケレハ其分限ニ過テ多勢ナルヲ感シ玉ヲ

世ニ傳フ 神君江城ヲ御進祭六月十九日

恐クハ非ナルヘシ

或曰井伊直政カ後士近友石見守康用カ嫡  
子登之助考用岩舟御旅館ニテ謁ヲ執テ別ノ  
采地ヲ受ル北条家ノ浪客山角紀伊守定方御  
家人ニ列セラレ千二百石ヲ賜フ

八月大

五日 聚楽ノ城ニ於テ秀吉ノ籠子鶴松三歩  
ニシテ早世ス妙心寺ニ葬リ神雲院ト号ス秀吉  
悼惜其限リナシト云







大坂の陣の事

天正十九年

八月

秀吉

十四日 伊達越前守改宗奥宮崎へ発向ス  
千時小野田ノ石川長内鹿間ノ鹿間尾法城ヲ避  
テ改宗ニ属ス宮崎ノ城兵迎ハ戦フ所ニ改宗カ  
先隊競ニ撃テ城中へ追入城ヲ圍ミ攻ルト云ハ  
氏墨壁高シ火炮蔽シクノ濱田伊豆ヲ始トメ多  
ク命ヲ殞ス是ニ依テ攻ルトヲ止メテ城ヲ取夫  
仕寄ヲ附柵ヲ設ケ其通路ヲ断ト云々 今日蒲生

氏ハ會津ヲ發シ九戸へ赴ク其兵二万二千五十備

ヲナニ列 惣小荷駄奉行ハ曾根内通助昌世軍奉

トス 行ハ三雲新左ノ門成持高木彦右ノ門攻鼓ハ南

部久左ノ門螺貝ハ氏ハ躬ツカラ是ヲ吹ヘシト

云々且洛陽ニ於テ秀吉制令ヲ出サル其詞ニ曰

定

卿亮入兵給人帳中ハ從他有ク格守一切名

下者々為借リ及由百餘ノ中ハ其代官兵人

ニテお申シ勿限申意ハ利所凡ノ儀

ハ云々



八月廿四日

廿七日 奥平宮嶋ノ賊將寄平石川長門鹿間  
尾張ヲ以テ伊達藤五郎成実ニ拠テ改宗ニ降シ  
ト欲ス 改宗是ヲ赦サントスル所今夜城中失  
火シケレハ改宗勢其弊ニ乘テ城ヲ屠リ百余人  
斬獲ス

是月 神君ノ命ニ依テ松平紀伊守家信大崎  
岩手山ノ旧城ヲ修理シ 神君ノ假館トナス  
此頃山口勘合米直友初テ其祿三百石ヲ玉フ  
是人ハ丹波ノ赤井越前守明家ニ男ニテ天正ノ

中頃織田信雄ニ仕ヘ長久手ノ後ヨリ 神君ニ  
奉仕シ漸ク月俸ヲ賜リ松平玄蕃政家清カ隊ニ  
属セラシ駿尻奥国寺城ノ警々出ニ列シ去年小田  
原御祭向ノ砌ハ曰及葭原ノ舩橋ヲ監察セシム  
越後参議上杉景勝ハ其似知羽尻左内ニ赴キ  
去年勃奥セシ一揆ノ残黨ヲ亡シ軍卒ヲ殘シテ  
彼三郡ヲ守ラシメ左内ノ地士ヲ先鋒トシ秋田  
ヲ歴テ南部ニ赴キ七戸二ヶ所ノ敵城ヲ攻陥ス

九月小

朔日 蒲生氏ハカ魁首蒲生源左水門御成凶



徒姉帯大守其勇五帝カ籠ル姉帯ノ城ヲ攻援ク  
時ニ根曾利ノ城兵五百余救ヒ来ル田丸中務少  
輔直政迎ハ暫時ニ五手組ノ多勢横ニ衝テ敵大  
ニ敗ス此武威ニ恐怖シ根曾利一戸西城ノ夷賊  
モ攻ルヲ待スノ逃亡ス

三日 神君御旅館ニテ高井外次郎実重御家  
人ニ列セラレ武元久米郡ニテ二百石ヲ賜フ是  
ハ父蔵人実廣今川義元ニ仕ハ桶狭間ニ志死シ  
実重モ氏真流宰ノ期迫節ヲ変セサル工ハ氏真  
ヨリ吹挙アル故ニ三枚彦兵衛守吉勘ヶ由左中  
門守大カ孤子

始テ奉仕ス

六日 二戸郡平精村ニ浅野長政吉吉ノ  
軍監 堀尾  
吉晴吉吉ノ  
軍監 井伊直政御當家ノ  
軍監 蒲生氏卜晉議  
ニ制策ヲ送ル

南無百勝天下人ホ志ニ以還信ハ御あり

天正十九年九月六日 浅野守正少將  
堀尾 吉吉

井伊直政  
蒲生氏卜



七日 氏卿淺野堰尾井伊津煙松前等三万余  
九戸修理カ居城福岡へ押寄ル処ニ僅波歩ト云  
徑一方ヲ通路トシ後ハ青山雲ヲ帯トシ喬木枝  
ヲ連子寄手相謀テ茂經朝臣一谷ノ大取ニ倣ヒ  
彼徑路堰切ハ見セ勢ヲ遣メ大銃ヲ祭シ氏ハ  
ハ虎賁狼卒ヲ率テ深嶽ヲ歴テ城ノ後切岸ニ歸  
テ持指毫甲ヲ以テ仕寄大銃救百丁連登セシカ  
ハ山鳴谷鷹ノ城中魂ヲ奪ハル浪打ハ向フ城兵  
甚夕周章メ引入畢ニ又

八日 寄手城ヲ攻ル城兵工藤權太夫ト云フ

鳥銃ノ妙手類リニ兵術ヲ顯ハシ寄手多ク死傷  
ストイハレ大軍敢テ僻易セス攻ルト急也時ニ  
九戸改實搦引左馬介清改勢河内突テ出苦戦ス西  
ノ方ノ寄手井伊兵部女捕カ從士近友石見康用  
カ子登之助秀用木戸口ニ臨ニテ歎ノ突出ス録  
ヲ奪ヒ取 神君ニ御勅氣ヲ得シ山田十太夫重  
利小林勝之介重次并近友康用カ部下木村吉右  
工門勝納勇ヲ奮フ且參死浪客安倍善太夫重真  
後四郎文矢ヲ類リニ城内ハ射込ト云三河ノ廣  
瀬高橋ノ産鈴木黨南時井伊家ノ部下トメ切ヲ



勵ス堀尾帯刀モ直改ニ劣ラシト同シク競ヒ攻  
ル南方ヨリハ淺野右改父子東方ノ大手ヨリ南  
部信直父子緊シク是ヲ攻撃ト云々  
搦引出雲己  
ヤ城ヲ守テ

爰ニ未リ九テト  
拒キ戦フ

此頃 伊達改宗佐沼ノ敵城ニ向フ如ニ賊徒  
町口兩坂ヲ守リ多勢嶮ニ依テ是ヲ防ク改宗勢  
竹把ヲ以テ仕寄堀際ニ至ル改宗ハ西曲輪ニ向  
ニ沿テ隔テ山上ニ本陣ヲ屯シ是ヲ攻ル行加ケ  
目町口ヲ破ル曉方城兵西郡ヲ弃テ本城ニ引入  
タリシカハ寄手其翌日晝夜攻之テ遂ニ本丸陥リ

士民二千余斬獲セラレ城將ハ逐電セシカ葛西  
ノ内西郡ニテ誅セラル改宗翌晚登木間ニ陣ヲ  
進メ敵砦ヲ攻ントス時ニ葛西ノ旧臣等改宗ニ  
降テ城ヲ避渡ス改宗相謀リテ是ヲ深溪ノ間ニ  
一置嶮シク番兵ヲ設ケ大崎岩手山ニ赴キ  
神君一符詔スル如ニ命ニ曰汝旧領ヲ轉シ封ヲ  
葛西大崎ニ得ヘシ依之佐竹岩城相馬領ニ課セ  
人夫ヲ出サセ此岩手山ノ城ヲ修築ス爰ヲ以テ  
居城トスヘシト云々  
羽柴秀次此時ニ本松ニ至  
ル改宗住テ詔シ登木間ノ城郭ヲ陥レ一揆ヲ挿



一置旨ヲ速ニ処ニ秀次怒テ速ニ是ヲ誅スヘキ  
旨下知アリ改宗則泉田安藝重元ヲノ賊長二千  
余人ヲ斬テ其首級ヲ二本松ニ送ラシム  
九戸郡福岡ノ敵城モ今堅固ニ井伊直政カ等  
策ニ依テ氏ハ等當所長兵寺ヲ以テ城中ニ書牒  
ヲ投メ曰救日ノ境戦最モ感スルニ堪タリ然レ  
凡天下ヲ敵トシ幾許ノ生命ヲ保ニヤ早ク軍門  
ニ降テ全ク殿下秀吉公ニ對シ害心ヲ挾ニテ乱  
ヲ起スニ非ス主信直ヲ恨メルト有テ逆謀ヲ企  
ル由陳謝セシメハ寄手ノ諸將是下カ勇敢ヲ愛

ノ其赴ヲ洛陽ニ達シ罪ヲ宥ノニ非ス懸命ノ地ヲ  
授ケント云改宗流石東夷ノ鄙夫是ヲ突トシ且  
鼈城ノ間士卒千余人命ヲ損シ拔城皆陷ルユヘ  
勇氣衰口ニ遂ニ此旨ニ從フ淺野長政相謀テ夜  
陰ニ及ヒ改宗一人下城スヘシ諸卒ハ皆三丸ニ  
退去スヘキ旨下知シケレハ修理改宗此調畧ニ  
乘テ城ヲ出テ本改ニ謁シ櫛引河内見勢九戸彦  
三郎大場四郎左門大里修理等三丸ニ出ル処  
ヲ虜トシ番兵ヲ附置城兵救百人ヲ三丸ノ櫓ヘ  
追登セ悉ク燒殺シ嚮ニ久慈備前カ方ニモ兵ヲ



進メ攻ケレハ彼又子三人モ降参ス其項羽榮大  
納言秀政ハ神君ノ御陣所ヨリ三里ヲ隔テ三  
ノ迫間ニ皆陣トリシ処ニ淺野長政ハ九ヶ修理  
久慈河内ヲ携ヘ氏々ハ掃引出雲大場田命左和  
門ヲ携ヘ至ル処ニ此族ハ凶徒ノ棟梁ナリ將命  
ヲ卫スノ何ニテ敵スヤト怒リ甚タシカリシカ  
ハ則右四人ヲ始其三族三十四人ヲ斬テ首級ヲ  
洛陽ニ送ル神君ハ一揆等カ没落セシ城々ニ  
却燒ヲ籠置其通路ヲ守ラシメ次第ニ軍率ヲ進  
メラル擇貫ノ城ニハ本多豊後守康重鬼柳ニ管

沼大悟亮定利水沢ニ依田右出門太夫康貞當時称  
松平  
前沢ニ松平和泉守家壽一ノ関ニ奥平大膳太夫家  
昌三ノ迫間ニ菅沼友藏定政藏ニ城々ヲ守衛ス  
上杉景信ハ南部ニ在陣ノ間庄内ノ地士一揆  
メ大橈字ノ城ヲ責ル城中騎士衛五十余防戦不  
叶メ城ヲ避テ大浦ノ城ニ退去ス又一揆モ首將十  
リノ軍令調ハサルユハ平賀吾可ト云フ者ヲ押  
テ將帥トセントス柴カ一族皆景信ニ從テ尚於  
ニ向フユハ凶徒トナランテヲ欲セサレモ多勢  
ニ圖レ強テ辭セハ忽殺害セラレシテヲ恐レ心



十ヲス是ヲ諾ス既ニ景勝尙部ニテ直ニ庄内ニ  
一揆起ルト因テ庄内ニ軍ヲ凱ス処ニ賊徒ニツニ  
分レ川北ノ一揆ヲ以テ其飯路ヲ遮ラシ居ニ鳥  
海山ノ西ノ麓三崎山ノ腰ナル徑ヲ守ラシム此  
処ハ東ハ高山岨々トシテ西ハ海岸絶壁タリ其  
徑ヲ墜切火炮僅ニ六挺ヲ以テ拒ントス爰ニ一  
夫怒レハ万夫モ當ルヘカラサル天嶮ノ地ニソ  
景勝大軍銳卒ト云ヘ凡為方ナシ干時上杉ノ功臣  
深ク謀テ鳥海山ノ腰三崎山ノ上ナル樵夫ノ通  
路ヲ尋得テ一揆ノ後ニ奇兵ヲ廻シ正兵ヲ大手

ニ進ノ敵ヲ會釈ス凶徒ハ此謀ヲ察セス徑路ヲ  
支ル時ニ後ヨリ奇兵夙ノ如クニ登シテ競ヒ撃  
ケレハ元ヨリ鳥合ノ徒忽敗北ス斯テ景勝酒田  
ヲ歷テ淡中村ニ至リ大浦ノ城ノ北ニ吾法寺ニテ  
夜ヲ明シ大浦ノ城兵ト標合テ一揆ヲ逐散シ賊  
將平族等可ヲ龍藏寺ヨリ尋ウシ火罪ニ如シケ  
レハ上杉陣中ニアル平賀カ一族戰慄ノ悉ク津  
樺ノ北ニ遁ル景勝庄内三郡ノ賊徒ヲ僉誅シ封  
内ニアル地ヲ悉ク追払ヒケレハ毒子ヲ携ヘ竄  
上秋田ニ離散ス世ニ景勝カ古ヨリ是ナキ火罪



ノ酷烈ヲ詰ル然メ大梵字ノ城代ハ下治右衛門  
秀久酒田ノ城ニハ信夫修理胤宗河村兵藏大浦  
ニ河村彦左ノ門ヲ衛守トシテ景祐ハ羽柴秀次  
ニ謁セシ爲ニ再ヒ奥沢ニ赴リ

神君御滞坐ノ間御家人ヲ以テ奥陽ノ地圖ヲ  
書カシメ區城域ヲ糾サレ水野左近清久大久保治  
右ノ門志佐後也丰藏守綱ヲ遣シ松島邊ノ割令  
ヲ下シ玉フ

十三日 秀吉ノ密旨ヲ蒙フリ羽柴大納言秀  
次 神君ト番議ノ伊達政宗蒲生氏ハヲ召テ改

宗カ教十世ノ旧知奥沢米沢羽沢長井三十万石  
ヲ指シ今度一揆勃竊與ノ地葛西大崎三十万石ヲ  
授リ伊達ノ家中急ニ居ヲ移シケルカ去年以來  
ノ兵革ニ依テ民家悉殘破セラレ村里寂寞トシ  
行路蕭條タリ上下困窮ト謂ヘカラスト云云改  
宗大ニ憤ラ含ムト云ヘ凡 詮方ナシ其跡三十万  
石ヲ蒲生氏ハニ賜リ會津仙道凡ニ七十二万石  
ヲ領ス其地ハ會津四郡ノ大沼川沼郡麻石川仙  
道七郡ノ白川磐瀨田村安種伊達信夫荻田柴田  
以上十一郡ノ外米沢三郡且是羽沢長井二郡ノ



翌年ニ至テ氏ハ七十二万石余ノ地ヲ改メ  
ケレハ總テ九十一万九千石余ノ高トナリ  
神君兼大納言秀次ハ平泉高館衣川等ノ旧跡  
覽アリテ国法ヲ改テ之飯路ニ勤キ玉フ  
ニテ秀次ニ詔  
ニテ後ニ飯ル  
上杉景  
平泉

後日氏ハヨリ秀吉ハ歎訴シケルハ尚部大膳  
大夫信直洲圖ニメ郡邑ヲ平治スル下ヲ得スノ  
家臣動乱ヲ案スルノ罪道レ唯シトイハレ九戸  
掃引カ僭上ノ起ル処日既ニ久シク信直カ指揮  
ノ及ヒ唯キ所以アリ且殺代ノ旧家断絶セン  
ヲ見ルニ忍ヒス殿下哀憐ヲ垂テ本領安堵セン

玉ト云ト秀吉是ヲ許容アリテ賊臣カ押合ノ  
地ヲ信直ニ返シ去一旧領全ク領掌サスヘシ且

氏ハカ外姪氏儀家ヲ以テ信直ニ嫁シ白後信直ヲ

麾下ニ准スヘキ旨下知セラレ上杉景勝ヲ奥  
改宗ノ利休カ瓢箪ノ茶入山下凡ト軍功抽賞ト  
云フ後馬ヲ秀吉ヨリ是ヲ賜フ

廿七日 神君下総古河ノ城迄至ラセ玉フ江  
府ヨリ諸士爰ニ迎入奉リ夷賊征伐ノ一ヲ賀シ

奉ル

廿九日 神君江城ニ御凱旋アリテ時異種口  
胞ノ連枝松平因幡守康元カ其祿ニ過テ今度ノ



軍旅ニ士卒多ク其備整フコトヲ感セラレ下迄ノ  
内ニテ二万石ヲ加ヘ玉フ

神君ハ 台徳公ヲ宗子トセラレ其威ヲ讓リ

玉ハン為ニ 関東卿入国以後領邑ヲ賜フ大小ノ

卿家人ハ皆 台徳公ヨリノ印章ヲ授ケラレ且

又去年仲冬ノ頃ヨリ斯御汝汰アリテ関八列ノ

神祇寺紙ヲ糺シ寄附ノ印章ヲ 台徳公ヨリ玉

フ或先蹤ニ任セ山林境内諸役免許ノコトノ御朱

印アリト云々上總ノ市原郡八幡宮領百五十石

ノ地御直筆ニテ印章ヲ彼祠官ニ授ケラレ

十一月大

八日 浴ニ於テ 台徳公参議ニ任セラレ右

近イ中將武藏守ヲ如元兼任セラレ此頃秀吉参

死吉良ニ遊獵アリ新庄後河守直頼小出大和守

吉英片相市正旦元小出播磨守吉改石川備前守

貞清口押部久光明赤松庄兵衛兼秀大野修理亮

治七福原右馬介直高片相主膳正貞隆三上五三

高祐植大炊女等帯劔騎馬ニテ先驅ス石田三成

増田長盛從后院等肩輿ニテ扈從ス其外諸士鋒

ヲ横タヘ弓矢ヲ携ヘ守護スト云々



廿三日 神君岩付ニ狩シ玉フ

廿五日 川越ニ獵シ玉フ

十二月小

四日 羽柴秀次内大臣ニ任云

十七日 台従公洛陽ヨリ江府へ還入セラレ

廿八日 秀吉俄ニ関白職ヲ副子内大臣秀次

ニ與奪アリ是ヨリ秀吉ヲ太閤ト称ス是ハ今秋

秀吉ノ愛子鶴松早世アリテ愁鬱ノ情胸ニ充テ

兼ク大明回愚帝連綿シ改道陵夷スルヲ閉玉

ヒケレハ大丈夫爰ニ百年ノ齡ヲ縮ムヘキニ非

ス未嘗朝鮮國ヲ撃ハ碌々タル弱民忽昔ニ從ハ  
ニ然ラハ躬ツカラ中花ハ波治一年アラスメ四  
百余州征伐ノ功ヲ遂ニト必勝ヲ掌ノ中ニ握ラ  
ルハ大膽ヨリ起ル処ナリ

是年 神君宮原勘五郎義照二千石ノ地ヲ与

御家人ニ列セラル是ハ古河御所晴氏ノ弟左

馬次憲寛下総宮原ノ地ニ住シ其子親門ニ入祥

雲院僧正至勝ト号ス其男此義照ノ

坂東ノ一色宮内女捕義直モ御家人ニ列シ武

元幸年五千百六十石ヲ与フ

後年義直致仕ノ  
子次郎照直家督其



玉フトキ直ニ隱居  
料千石ヲ与ヘテ

武田信玄ノ弟川窪与左衛門信正ニ武田ノ内  
二千石ヲ賜フ

松平藏人信孝ノ遺子九郎右衛門重忠ニ食邑  
ヲ賜ル

土屋惣藏忠直後任氏  
了女侍モ又采地ヲ相瓦称宣井

村ニ放テ是ヲ賜フ

参沢药屋水野泉政忠重ノ臣高木甚太郎清方

其子甚右衛門清本モ召出サレ大番出ニ列ス

杉浦友次八名則勝参沢六君郡久吉ヨリ来ル是

其年所勞ニ依テ遲参スト云々然レモ神君ノ

御旨ニ応セス富士見番ノ列トセラル杉浦友次  
前時勝子

遠近大屋堀内産本間五太夫大番出ニ列ニ三百石

ヲ賜フ五味太郎左衛門被 召出俸美六十俵ヲ

与ヘテ五味ヲ攻メテ事ト称ス

坂东ノ列士召テ御家人トナル者多ク長尾但

馬守顯若カ老臣江戸豊後官政時ニ江戸御在城  
故改小野左子

ト称ス北条氏照カ旧臣加茂官次兵米直茂上瓦ノ

小幡太郎左衛門正俊ヲ初若テ之後边半四郎宗

綱十三女改圖書 初テ奉仕ス



神君関八段へ通用セラレヘキ為ニ後友徳乘  
半門人庄三節光次ニ 命シ黄金ヲ吹テ大小ノ  
形ヲ定メテ是ヲ鑄サセラレ但シ大判ハ金目四  
十八文目ヲ以テ一牧トシ是ハ室町將軍家ノ流  
例也往古ヨリ今ニ至リ小判ト云フハ十ク灰吹  
ノ砂金ヲ權衡ニ懸テ通用スト云ヘトモ急務ヲ  
ナサス世ニ堆茂スル也 神君尊慮ヲ慙マサレ  
今度先次ニ 命シ昔年ヨリ在シ金銭ニ四増倍  
ノ積リ四文目八分ヲ以テ小判トシ是ヲ鑄サセ  
通用其便ヲ得サセ金銭ト成ニ世ニ 行ハルト云

江府ノ山王へ 台從公ヨリ 祭田百石御寄附

アリ

駿遠參甲信五列ノ内寺社領 神君ノ御印章  
ヲ唯<sup>准</sup>批トシ秀吉大掾無相違是ヲ寄附セラレ

鳳閣寺傳記ニ遠州敷智郡濱松ノ二端坊ハ  
神君濱松ニ御在城ノ中御祈願トシ創建ノ地  
ナリ毎月十八日御參詣アリ任職加列白山ノ  
大先達法印常慶ハ俗姓松下嘉久米久綱カ一  
族ニメ酒達大度賦<sup>禊</sup>ニ精レケレハ必陣中へ  
携ヘラレ兵糧運送ニ當ラレ且<sup>相</sup>悃祈ラ尽サ



セラレ駿府へ移リ玉フ以後ハ駿陽一國ノ賦税祝  
ヲ汝汰シ尉所ヲ司ラセラル御始是レニ依  
テ府城ニ常慶門同櫓等ノ称後世ニ至テ存シ  
常慶子孫永ク麾下ノ從士ニ列ス世々左太二  
端坊ノ後任ハ此時秀吉ヨリ先判ノ如ク敷智  
郡ノ海老塚村寺嶋江村ノ内ニテ寺産五  
十二石ヲ授ケ印章ヲ賜フ二端坊ハ元文ノ今  
ニ及シテ右ノ寺領ヲ案堵シ且宇多帝ノ  
勅願トシテ聖寶僧正ノ用基タリシ和列吉野郡  
百螺山鳳閣寺ノ住職ヲ兼帯シ色衣ヲ聽サレ

當山方ノ修驗者一万四五十寺ノ觸及トシテ常  
ニ江府ニ相諾法中ノ仕置ヲ掌リ畢ン又元  
文ノ現任ハ大御番及三浦肥後守便次カ六男  
ニシテ法印俊堅ト号ス



武徳編年集成卷之四十貳

文祿元 壬辰年

正月大

二日 松平右馬允宗忠幸又

長次ノ松平兵庫  
以一宗カ長男ナ

五日 秀吉朝鮮征伐ノ魁首小西加茂ヲ召テ

驥ノ駿馬ヲ行長ニ与ヘ尚無妙法蓮華經ヲ書ス

ル旗ヲ以テ清正ニ与フ此旗ハ信長捕只ヲ秀吉

ニ賜フ取授ケラレシ佳例ト云々宮城長次節豊

木村高敦 撰



盛後任丹波守 五千石ヲ賜リ對忍ノ宗義智朝鮮國へ  
渡海スヘキニ依テ其留守トシテ彼國ニ赴クヘ  
キ旨ヲ命セラレ

朝鮮征伐今春ヨリ初ルト云ヘトモ 即當  
家ノコトニアラヌ殊ニ御家人渡海十キ工ハ  
曾テ是ヲ記サス

二月小

二日 秀吉朝鮮征伐ノ為ニ肥前名古屋ニ下  
向アル工ハ 神君モ役命ニ依テ東國奥羽ノ諸  
將上杉伊達尚ア佐竹等ヲ率テ今日武江ヲ御首

逢アリテ名古屋ニ赴キ玉フ本多中務大輔忠勝  
大久保治ア大輔忠隣小笠原信濃守忠備松平周  
防守康重等ヲ初麾下ノ士一万五千余ト云ハ此  
賊内後紀伊守信成曰左馬外政長永井右近大夫  
直勝栗生新右卫門白旄ヲ免許セラレ大番五組  
ノ隊及トナル 柳原式ア大輔康政酒井河内守重  
忠本多秀次高康重松平三市次高康親三宅敏後  
守康貞其組吉良高橋衆三十騎トモ云ハ 江城ニ留リテ 台能公  
ニ奉仕ス

或曰柳原ハ累年當家ノ先鋒トシテ佳名世



ニ高シ今度 神君異邦へ御渡海アラハ最  
モ魁首トシテ 功ヲ顯ハスヘキ旨類リニ願  
望ス神君汝ハ吾千城肱股ノ臣ナリ爰ヲ以  
テ 秀忠ヲ補相タラシム旨密シ 御心慮ヲ述  
サセ玉ヒ康政兼服ス又加茂清正ヨリ康政  
カ桔梗笠ノ小鳥印ヲ借テ朝鮮先鋒ノ武戦  
ヲ輝サン由ヲ請フ康政是ヲ許ス清正飯朝  
ノ取再ヒ是ヲ神原ニ返スト云々  
阿部善九郎正次 後任備中守 小田原ニ至リ強テ  
神君ニ供奉センヲ欲ス 神君彼父伊子守

正勝既ニ供奉ノ列タルヲ以テ類ニ止メ玉フ  
又御船ノ榮監山本帯刀成氏多田三八昌細山  
高官内信直伊豆ヨリ船板ヲ出シ是ヲ造ラシ  
メ高力河内守清長惣奉行トシテ是ヲ沙汰セ  
シム

或曰常列河内郡下妻城主多賀谷修理大夫  
政経虚病ヲ構ヘ名古屋ノ役ニ懈ル秀吉怒ツ  
テ 神君ニ達シ是ヨリ筒井伊神原ヲシテ軍  
ヲ下妻ニ發セシム且秀吉ヨリ岡野江雲祢ヲ  
モハシ其実否ヲ問フ多賀谷陣謝スルコト類



リニシテ過科黄金千両ヲ出シ其罪ヲ償フ

十六日 黎明 神君石部ノ旗ヲ祭シ御入洛

アリ

十九日 公子下野守忠吉 千貳十三ヶ重名福松丸後薩广守

武列忍ノ城十二万石ヲ依シケル忍ノ旧主松平

主殿少家忠ハ下総上代ノ城ニ移リ後又小美川

ノ城ニ得替久且松平源三郎勝俊ノ養子豊前守

勝政 實ハ水野次郎 未邑千五百石御授ケ 後次郎重仲ハ

神君及勝俊ノ外叔父ナリ

三月大

朔日 朝鮮征伐ノ先鋒小西加茂等洛陽ヲ祭

ス

四日 神君ノ御外孫上列長根ノ城主松平右

京大夫家治卒十四ヶ是ハ奥平信昌カ次男ナリ

十七日 神君 一万五 洛陽ヲ御首途 秀吉ヨリ

夏五石ヲ以テ一泊 奥羽常列ノ諸候驥尾ニ從フ

コトニ附與セテ 洛陽少將秀康享年十九ヶ

此役ニ從テ進祭セラル

二十六日 秀吉肥前名古屋ニ越シタメ今日

出京セラル抑名古屋ハ鍋島加賀守直茂カ附庸

波多參河守信時カ知ナリ去年九月ヨリ當城



ヲ以テ秀吉ノ陣城ニナシ玉フヘキ為ニ經營セ  
ラル假館ト云ヘ凡其結構得テ云ヘカラスト云  
後寺以志广舟廣高當城  
ヲ毀テ日國唐津ニ遷ス

二十九日 秀吉播列姫路ニ至ル羽列ノ戸沢  
平九節光盛此処ニ頓死ス

四月小

上旬 秀吉藝列廣島ニ至リ嚴島ニ遊フ且青  
蚨一貫文ヲ以テ 神前ニ抛テ其錢ノ陽面悉ク  
顯レ下ニナルナリシハ異域退治則掌ノ中ニ  
アルヘキ旨宣フ則一士ヲシテ是ヲ地ニ散サシム

凡此ニ悉ク陽面顯然タリ衆皆驚キ大ニ欣悦ス  
蓋シ二錢ヲ以テ合セテ一錢トナスユヘ永永通  
宝ノ四字兩面ニ存ス今ニ此青蚨嚴島ノ 神庫  
ニ藏テ是アリト云ヘ且長而國府ニ至テ 仲衰  
天皇ノ神功皇后ノ社祠ヲ拜シ赤間關ニ於テ  
安徳天皇ノ尊像ヲ拜覽中旬名古屋ノ城ニ着シ  
其日ヨリ四十八万人ノ糧米ヲ諸率及舟子等ニ  
至マテ配分セラレ

十二日 小西加茂名古屋ヨリ帆ヲ朝鮮國ニ  
送ス是月廿八日彼國釜山浦  
ニ着ス翌日其城ヲ屠ル



按スルニ 神君名古屋ニ到着シ玉フ其日  
限ヲ詳ニセス或曰秀吉 神君ノ宮ニ至ル永  
井右近大夫直勝候ス秀吉近臣ニ其姓名ヲ問  
フ処ニ尔ノ由ヲ答フ秀吉是池田勝入ヲ討  
シ者カ嗚呼壯士ナリト関者欣羨スト云々

又曰 神君供奉ノ内逸見弥吉又助ヲ召テ  
汝カ先父四節左門次ヲ相死中原ノ所知  
ニ寓居アラシメ孝ヲ福スヘキ旨 命セラレ  
諸人其仁惠ヲ称歎ス 北条安房守氏那カ臣ニ  
テ天文甲子相召厚木ニ  
戦死スル四節左門  
次久カ子ニテ  
小四節左門次ト  
稱スル是ナリ

二十日 北条十節氏房享年二十八歳ニシテ  
蟄居ス是先亡氏政ノ庶子ニシテ前ノ武器寄付  
ノ城全タリ

五月小  
七日 細川右京大夫億意卒ス是人ハ京兆晴  
元カ子ニテ初メハ昭元ト稱ス 佐々木兼禎カ  
外孫ナリ  
十六日 秀吉書牘ヲ榑原康政ニ贈テ  
ル

秀吉書牘ノ文ハ  
去ルニテ  
人教教ハ  
抑寄ルル  
小倉  
氏  
云々



七山中一山遊り來てく人敷たてし  
おのり新説と云はる由とし生捕つる  
はる藤一編と云はるはしゆはる  
百中一はあつたゆり

あつたゆり

柳多可くは博也

世後目ヲ部テ又一筒ヲ投セラル

為名後厨尼色 足紙伊心道旅之元帳也  
是物 神を西く 是志能思は柳能能也  
半 新説百編之藤能解之は新説之は

神々 水仲友と云はる先づ九列に  
奇鳥之族と云はる博也師と云はる  
切之は神と云はるはるはるはる  
出之は神と云はるはるはるはる  
す介と云はる

あつたゆり

柳多可くは博也

七月小

十日江城ノ經營始ル

神君名古屋ニ御

在陣タリト云ハ片留後ハ諸士其一ニ預ル



朝鮮へ渡海ノ諸大将王城ヲ破リ三道ヲ平ケ  
進ケレトモ糧食ツカス刹大明ヨリ加勢多ク  
来リケレハ三奉行増田右衛門尉石田治アヤ捕  
長東大藏大捕荒ニ加友清正小西行長ヨリ秀吉  
ニ人衆ヲ加ヘ軍糧ヲ増益シ玉フヘシト云ケレ  
ハ秀吉 神君元前田利家ト日夜ニ談セラルル  
ニ黒田勘ヶ由孝高入道如水坐ラ隔テ、独言シ  
ケルハ大軍ヲ出スニハ大将ヲ能擇フ一古ノ法  
ナリ日本ノ兵朝鮮ニ入ル暇ヨリ大軍ヲヨク下  
知スヘキハ 源君ニ過タルハナシ然ラスレハ

利家カ我等ナトヲ遣ハサルヘシ 兵ノ道ヲ知リ  
因テ治ムヘキ者ナテスシテ朝鮮ノ民畏服スル  
コトアルヘカラス然ルニ加友小西ナトニ軍吏  
ヲ任セラル、故ニ兩人已カ勇氣ナルマ、ニ威  
勢カヲ争フ小西法ヲ重ケハ加友是ヲ用ヒス加友  
法ヲ重ケハ小西肯ハス是ニ依テ朝鮮ノ人民皆  
疑ヒ悉ク逃去テ我兵ノ得タル三道皆荒地トナ  
リ一草ヲ生セスカクノ如クニテハ朝鮮ノ治ル  
コトハアルマシキト云ケルヲ秀吉障子ヲ隔テ  
是ヲ問玉フ或取秀吉 神君前田利家齋生氏



ハ淺野彈正少弼長政ナトヲ召テ議セラレケル  
ハ日本ノ兵朝鮮ニ在テ敵國ノ之思フ計リニテ  
敵ヲ破ル勢ハナシ我躬ツカラ渡海シテ彼國ヲ  
治ムヘシ日本ノ留主トシテ諸國ノ鎮タテ人  
ハ新田殿ニ増タル人ナシ前田利家ヲ將トシ  
十萬ノ兵ヲ我左軍トシ蒲生氏ハ將トシテ十  
萬ノ兵ヲ右軍トシ麾下ノ兵十萬ヲ中軍トシ  
テ都合三十萬余ノ軍士ヲ帥ヒ朝鮮へ渡海シ直  
ニ大明ノ王都ニ入テ中國ノ皇帝ト成ヘシ早ク兵  
船ヲ備ヘ用意スヘシト命セラレケレハ 神君

岡召テ悦玉ハス弔幼年ヨリ武勇ヲ專トシテ壯怯  
弱ノ名ヲ得タルコトナシ今殿下渡海シ玉フニ  
我独リ日本ニ留リ何トシテ空シク日ヲ送ルヘ  
キヤト仰セケレハ淺野彈正少弼長政進ミ出ラ  
神君ニ謂テ曰只今太閤ノ仰ハ恐ナカラ孰ニツ  
カレ玉ヒテ狂シタル言ヲ宣フト見ヘタリ貴公  
心ニカケ玉フヘカラスト云フ太閤大ニ怒リ長  
政ヲ手又セント座ヲ立シケルヲ利家氏ハ袖ヲ  
ヒカヘテ殿下ノ御手ヲ下シ玉フヘキニ非ス我  
輩不義ヲ罪スヘシト云ケレハ長政躁カスシテ



微臣等身ヲ失テ国家泰平ニ成ナハ教百人ヲ殺  
シ玉フトモ命ヲ惜ムヘキニ非ス近年日本國中  
ノ人民一日モ休ム隙ナシ杜者ハ軍役ニ苦しミ  
老弱ハ運送ニ疲レテ国ノ費民ノ愁勝テ計フヘ  
カラス只今殿下渡海シ玉ハ群盜蜂起シテ  
従川殿ト云フトモ四海ノ乱ヲ静メ玉フヘカラ  
ス願クハ渡海ノコトヲ止メ給ヒテ朝鮮ノ兵ヲ  
引取早ク京都ヘ皈ラセ玉ヒ人民モ平安ニ国家  
長久ノ謀ヲ運シ玉フニシクハナシト謹ンテ述  
ケレハ太閤弥怒リ甚シ利家臣ニ長政ヲ叱シテ

座ヲタシム長政旅亭ニカヘリ罪ヲ待ト云ク

十四日

肥後熊本城主加茂清正カ將分佐敷

ノ城代加茂与左兵門ハ朝鮮ニ渡海シ其子与平

治<sup>ナニ</sup>家臣井上弥藏<sup>兵後</sup>安田与七<sup>兵</sup>帛<sup>孫</sup>

堀善右兵門等二十余人恒卒女<sup>右</sup>ヲ以テ城ヲ守

ラシムテ敗薩<sup>兵</sup>ノ任人梅北宮内右兵門一揆ヲ

企テ内ニ謀者ヲ佐敷ニ附置塚善右兵門カ朝鮮国

ハノ粮米運送ヲ決セシ為ニ四里ヲ隔ツル日

奈久田野浦ヘ卦キケルヲ見濟シ急ニ佐敷ノ城

ヲ攻ル城兵微ニシテ拒クニ堪ス安田井上ハ全



予平治ヲ携へ梅北ニ降ル梅北則城ヲ得テ近境  
ヲ侵畧スル由清正カ居城熊本ノ城代ヨリ是ヲ  
往進ス秀吉大ニ驚キ響ニ浅野長政カ諫諍セシ  
コトヲ思ヒ合サレ 神君ト睿議シ長政ヲ召テ  
汝カ長男左京大夫幸長ヲ大将トシ肥後ニをシ  
一揆ヲ退治スヘシト命シ且 補君ニ向テ幸長  
未タ弱年ナリ本多忠勝ヲ添テルヘキ旨ヲ宣マ  
フ 神君則中務太傅ヲ召出サレ太田忠勝ヲ近  
ク呼テ幸長壯勇ト云ヒ弱年ニシテ軍道未熟  
ナリ汝能楽ヲ輔ステ陣中ノコト大小トナク是

ヲ計フヘシト命セラル幸長忠勝座ヲ起テ肥後  
ニ赴リ彈正少彌長政愁眉ヲ披キ意気洋々タリ  
堺善右忠門日奈久ニ於テ一揆ニ城郭ヲ得ラル  
由テ関テ忽弛至テ戦ヲ決セシトスレトモ衆是  
ニ門セズ敗ニ庄官女兵衆一人堺カ響テ取テ相  
随フ堺草薙ニメ佐敷ニ赴キケルカ早速援兵ノ  
コトヲ熊本八代兩城ト相良カ求麻ノ城へ請フ  
然シテ佐敷ニ往テ忽梅北ニ降ヲ乞テ仕ヘンコ  
トヲ望ム梅北ハ辺土ノ夷礼義ヲ每ヘス加茂与  
左忠門女事ヲ以テ已ト誓姻ヲ整ヘシト欲シ堺



カ謀ニ降ルコトヲ案セス其甥弥吉ヲ質ニ取至  
降ヲ許シ嫁娶ノ席へ堀井上安田ヲ招キ酒宴ス  
其後軍ハ城下ノ市店ニ出テ宴ヲ催フス既ニ献  
盃回リテ善右出門者ヲ堀北ニ与フル躰ニテ忽  
服指ヲヌキテ是ヲ折ケルカ柴又剛強ニレテ疵  
ヲ被フリナカラ真ニ弛入人質弥吉ヲ害セント  
ス善右出門透サス追テ入弥吉モ弱年ト云ヘ尼  
善右出門カ密意ヲ猜テ懐劔ヲ持ケレハ是ヲ  
拔テ善右出門ト立夾シテ堀北ヲ折ル善右出門  
大音揚テ宮内右出門ヲ害セシ旨ヲ呼ハリケレ

ハ堀北カ士城中ニ残ル者ハ寡シ肝ヲ消テ逃走  
ル井上安田等一旦幻雅ノ与平治ヲ助ニ為ニ梅  
北ニ降りシコトナレハ四方ニ弛廻リテ凶徒百  
余人ヲ折獲シ佐敷ノ城内ヲ取固ル由注進ス依  
之淺野ト本多既ニ筑後ト肥後ノ堺地ノ開マテ  
発向セシカ秀吉是ヲ招キ飯之淺野長政ヲ肥後  
ニ卧カシメ同政ヲ糾サル  
二十日 秀吉堀井上ニ感状ヲ授ツケラ  
ル

今及堀北之月七島古原一揆之賊ハ軍







朋筑阿弥カ妻トナリテ大和太納言秀長ト  
神君ノ簾中南明院ヲ生ムト云ク秀吉名古屋ニ  
在テ軍兵ヲ朝鮮ニモシ彼國ヲ討シムル由大廳  
ニ達スト云ハトモ是ヲ信セス秀吉万里ノ波濤  
ヲ凌キ外國ニ渡海シ幾年ヲ経テ戦伐ノ功ヲ遂  
ンヤ再會期ナキ由悲歎ノ余リ病惱類リニ重ク  
遂ニ逝去ト云ク

九月小

三日大地震

九日 台従公權中納言ニ任シ從三位ニ叙セ

ラニ

十月大

六日 秀吉再タヒ洛陽ヲ至シ鎮西ニ封キ王

フ

十日 台従公京都ヨリ武陽ノ御下向

十二月大

十七日 新見彦左本門正吉卒ス享年五十六  
考ナリ其子勘三郎正勝祿ヲ襲フ此父子名久手  
ニテ戦功アリシナリ

是年 神君邸四男誕生アリ母堂ハ遠別ノ産



茶河十此君若君色思ク容貞醜カリケレハ武将ノ  
相ナシトテ 神君民間ニ下スヘキ旨 命アリ  
麾下野別長沼ノ皆川山城守廣熙密ク糧育シ辰  
千代九ト称ス上総少忠輝朝臣是ナリ

神君郎外孫真平清匡 干取十与信 昌カ四男 台従公ヨ

リ郎称号又郎諱字ヲ賜リ松平忠明ト稱ス且上

列小幡ニ於テ米邑三万石ヲ賜フ 後下総守 二任ス

頼勤母藝守頼忠カ食邑武列羽生蛙川ヲ轉シ

上列郡波德社ヲ賜フ

保科敬前守正直 鎔彈正正 清子ナリ 其勇甚四郎正光ヲ

以テ養子トス 後彈正忠 二任ス

関東武名ノ浪客唯彼田善右衛門憲利 周橋翁 利カ次

也山田五郎兵衛直取 酒井一郎兵衛康治江尻ノ

浪士永田庄九郎政次 織田ノ臣 四郎左工門北畠 政吉カ子ナリ

ノ浪客石丸孫次郎有定被召出脚家入トナル

或曰織田信雄ヲ秀吉ヨリ羽州秋田へ送流

ノ暇 神君牧野讚岐守ヲ使節トシテ信雄ノ

安否ヲ尋玉フ此石丸其暇マテ随逐ノコト関

也玉ヒ是ヲ感セラレ被召出ト云ク 後植髮シ 十半首ト

ス号



北条家ノ浪客頼朝ノ惣右衛門定吉卿家人ニ  
列セラルル是人ハ八条流ノ達兼タ其北条上滝川  
一益武列小島原戦以來北条家ニ於テ源次郎ト  
称シ群ニ抽ニテ度々ノ勇切アリテ氏直高野  
山ニ流落ノ期ニテ節ヲ愛セス附従フユハ  
神君殊ニ哀憐ヲ施シ玉フ  
妙壽院惺寓ハ金吾秀秋ノ勸メニ依テ名古屋  
ニ下向ニ神君ニ見エ則聖学ノ大要ヲ問キ玉  
フ  
元ハ出雲大社ノ巫女因ト云モノ蒲生家ノ浪

客名古屋山三郎ト稱シテ神乐ヲ一擧シテ哥舞  
ス是古ニ所謂白拍子ノ類ニシテ雅乐ノ乱凡タリ  
淫色大ニ人心ヲ惑スト云々

羽柴秀次甚タ射郎ヲ好メリ其術ハ大坪流荒  
木志广守元清入道ニテ安志ト号ス射郎ハ洛陽山科ニ住  
切磋琢磨スル処ノ片岡平右衛門家次吉田源八  
重氏ヲ始六人ヲ召テ其術ヲ試ミラル家次ハ吉  
田出雲守重高カオ一ノ高才タリ源八重氏ハ後  
教前家ニ仕ヘ遂ニ神君元台従公ニ并謁ス  
晩年重氏ハ入道ノ御西ト号ス



肥前長崎ノ地ハ秀吉天正丁未、夜堂高虎寺沢  
廣高ヲ以テ檢新アリテ鍋嶋加賀守直茂ニ預テ  
至ルト云ハトモ今年ヨリ寺沢志テ守ヲ以テ奉  
行トセラレ

勢凡安濃津ノ城主織田上野介信兼カ永祿十  
ニ巳巳年以來にスル食邑並加恩ノ地ヲ秀吉ヨ  
リ没収セラレ江列ニテ僅ニ万石ヲ賜フ入道シ  
テ老太舟ト号ス一族分ア左京亮政壽ヲハ秀吉  
ノ直臣トシテ勢別上野一万石ヲ授ク関原乱後  
神君ヨリ丹波ノ氷上三万六千石ヲ老太舟ニ授

ケ勢凡ノ林一万石ヲ長男民ア少輔信重ニ賜フ  
秀吉ヨリ當孟秋類リニ猶子秀次ヲ朝鮮へ渡  
海ノ一ヲ催シ玉フユハ秀次止ムトアタハス軍  
令ヲ下ス天正七月十日然レトモ其以後大龜病腦  
且逝去ニ託シテ秀次今ニ至リ渡海ニ及ハス浮  
言類リニシテ群臣肩ヲ擧ム



文祿二癸巳年

正月小

朔日 肥前名古屋ノ旅營ニ於テ在陣ノ卿家  
人 神君ノ歳首ヲ賀ス於武江卿留守ノ輩

台従公ノ参賀ス

五日 正親町天皇崩御 宝篋七

是月 武陽ヨリ戸田三郎右衛門忠次高木主  
水清秀名護屋ニ至ル此二人武邊場救ノ英士ト  
云ハトモ衰老ニ先達テ名古屋ノ供奉スルコ  
トヲ許サレ然ル処坂東ノ蒼旣ニ當三月 神君



朝鮮へ御渡海ト云く是ニ依テ千里ヲ遠シトセ  
スシテ伺公ス 神君御感ノ余リ秀吉ハ此コト  
ヲ宣マヒケレハ秀吉則テ兩人ヲ召テ汝等勇切  
ノ譽 徳川殿物語アリ 弱冠ノ族是ニアヤカル  
ヘキ旨ヲ演ラレ城ニ必テ二士武門ノ眉目是ニ  
過ハカラスト云ク

三月小

三日 江城經營成就ス

當城ハ大田道灌裔城

經營セシ名城

ナリト云ク

四月大

朔日 秀吉大伴宰相秀統朝鮮ニテ怯弱ノ取  
屬アルユハ豊後國ヲ没収シ長列ニ遷流元利輝  
其息左兵衛督義宗ヲハ武門ヲ止メ逐テ 廷臣  
ニ列セラレハシトテ當分百人ノ月俸ヲ与ヘ肥  
後熊本へ福ス且島津又太帝其諱ヲ下日姓兵庫  
太茂弘ニ從テ朝鮮ニ在陣シ茂弘カ旨ヲ背ク是  
柔弱ヲ致ス処ニトテ食邑ヲ没収シ一旦茂弘ニ  
預ケラレ彼多ニ河守信昭ハ鍋島加賀守カ麾下



タニ処ニ是又怯弱ノ取為アリトテ肥后唐津ノ  
氏邑ヲ没収シ信時ヲ黒田長政ニ預ケテラル爰ニ  
於テ豊後竹田七万石余ヲ中川修理大夫秀成ヨ  
枅佐伯三万石ヲ太田飛騨守一吉ニ授ケ且太田  
ニハ總高一万五千石分ノ与カテ附屬シ秀吉ノ  
公田十萬石ヲ掌テシメ其奈郡ハ垣見惣谷福原  
竹中等ニ授ケテラル

五月小

五日 名古屋秀吉ノ本陣ノ北方入江ヲ隔テ  
神君元利家ノ陣營是ニ相並フ伊達政宗カ陣館

其北ニアリ取ニ 神君ノ御假館近ク冷水涌出  
ス利家ノ臣篠原出羽守カ部下ノ人夫ニ町余ヲ  
歩ミ来リ是ヲ汲ントス元ヨリ多ク出サレ冷水  
故 御當家ノ下卒制シケルヲ是非可汲ト罵シ  
ル其邑ヲ圍テ利家ノ陣所ヨリ二三人宛弛来リ  
神君ノ方ヨリモ追々群衆シ双方ニ三千人ニ至  
ル利家ヨリハ大祿ノ輩一人モ出ス長九郎左衛  
門連抱五百計ニテ門戸ヲ守ル味方ハ本多中勢  
大將忠勝等大祿ノ將十人計弛出是ヲ鎮ントス  
互ニ矢炮ヲ発セサルマテニテ鎗ヲ横夕へ白眼



合フ入江ヲ隔テ陣スル蒲生氏々淺野幸長毛利  
河内守秀頼恠舸ニ衆テ 神君ノ假館ニ馳至リ  
双方入魂ノ諸將素層ニテ兵器ヲ持セ群集シテ  
天下ノ重負ニ及ハントス 神君ヨリ渡辺服ア  
兩半藏ハ恠卒三百計ニテ利家ノ後ヲ迫リテ  
起ラハ利家ノ本陣ヲ封破ントス伊達政宗ハ先  
臣二三輩ヲモシ扱ハシメ漸<sup>漸</sup>静リ利家ヨリ從  
山五兵出則秀ヲ以テ全ク人夫等カ辨論ニ起ル  
殊ニ太閤ノ轡ニ違セシコトヲ恐ル早ク制止ヲ  
加ヘント請フ 神君是ヲ諾シ玉フエハニ双方

静謐ス其後秀吉 神君并利家ノ假館ヲ名古屋  
ノ城邊ニ移サル今日武元ニ於テ府中六所大明  
神ノ祭礼ニ松平主殿ノ家忠瀧ノ良馬ヲ宰シム  
台從公ノ尊慮ニ応シ彼馬ヲ獻ス

二十一日 卿家人柴田七九郎康忠卒ス 享年五十  
六法名 軍忠他ニ異ナル人傑ナリ 其子康長  
東白 祿ヲ襲フ

六月小

三日 五井ノ松平太郎右衛門景忠卒ス 享年五十  
五ヶ月初九 帝ト稱ス

十日

卿家人袁山豊後後盛卒ス



十五日 大明ノ西使名古屋ニ来ル謝用拵  
客ハ 神君ノ宮中ニテ郷食セラレコト今日ヨリ  
二十一日ニ至ル二十一日ヨリ浅野右政太田和  
浦ノ観音寺以下明使等  
餐忘ノコトヲ掌ル  
二十日 肥前名古屋ノ郎陣營前ニテ郎家人  
阿戸傳八郎恨ルテアリテ拍原新五郎ト云傍輩  
ヲ殺害メ出奔ス

七月大

十八日 島津龍伯才祈答院左京門太夫共久  
入道晴義朝鮮国ノ働怯弱ノ旨秀吉ノ怒リ斜十

ラスシテ細川兵ア太怖友孝入道玄旨ヲ檢使ト  
シ自殺セシメラル是人病懼ユハ怯弱ノ名ヲ得  
ルト云々

八月小

三日 秀吉ノ毒浅井備前守長政  
カ娘淀殿ト云フ 男刀子ヲ産ス  
拾九ト称シ後秀頼ト号ス秀吉大ニ歡ニテ朝鮮  
ノ扱沈惟毅是ヲ整ヘントス軍旅ノ一ハ前田中  
納言利家ニ委ヌル由ヲ諭シ布舟ニ乗シ名古屋  
ヨリ大坂ニ飯ラレ弄鐸ノ慶天下ニ滿ル 神君  
モ是ヲ賀シ玉ハン為ニ不日ニ名古屋ヨリ覽ヲ



解テ帆ヲ登シ玉フ

二十九日 神君大坂ニ御着岸ト云

九月小

朔日 真田源五郎信幸後五位下伊豆守ニ任

叙ス

因九月大

二日 台從公武江ヲ登シ御上京アリ是ハ

神君モ名古屋ヨリ堆波ニ御帆ノ昔先達テ是  
アルニ依テナリ

十月大

十四日 神君御飯國ノ夕ノ大坂ヨリ先々御

上京ト云

十六日 蒲生龜彈守氏卿カ臣白石ノ城至蒲

生四角兵衛本氏以安赤座中山ノ城至蒲生丸文以可

本氏上坂ト互ニ清陪徹糸邑ニ於テ争論シ既ニ合戦ニ

及ハシトシケル西人折節會津ニ在勤セシカ蒲

生源左衛門卿成本氏坂以下中人トシテ交和ヲ整

フ

二十六日 神君江城ニ還入シ玉フ其海陸長

途微恙ナキヲ緇素素喜シ歎悦ス



傳テ曰一色土運カ穉子重政後稱次今度卿  
下向ノ刻參瓦長沢茶店ニ於テ并スル処ニ  
卿慈厚ノ 卿後ヲ蒙フルト云ハトモ僅ニ七  
世ナルユハ仕フルユトヲ得ス然ルニ久松佐  
渡守俊勝カ前腹ノ娘ハ尾刈ノ一色帶刀左勝  
ニ嫁シテ其産ケル処ノ娘曰弥次郎貞重入道  
尔運カ毒トナリ重政ヲ産ム重政ハ松平定勝  
後任隠カ又甥タレ由緒ニテ定勝カ知ニ在テ  
扶助ヲ得ルト云々寛永十六癸巳十月  
ヲ賜フ是當此人源大猷公ハ并指ニ追テ俸系  
太郎政統カ祖ナリ

或曰北条ノ旧臣ニ本多全勝正家ト云者ア  
リ氏直ト佐竹義重ト於上瓦友園對陣ノ時小  
池ノ沼ニテ鎗ヲ合セ勇烈ヲ顯スコト 神君  
ノ高岡ニ及ヒ天正十八庚寅以來卿家人ニ列  
ス然ルニ名古屋卿在陣中遠犯ノ族アリテ正  
家ヲ以テ誅セシメ玉フル其功顯然タリ依之  
卿飯府ノ時武瓦葛西从篠崎村四百五十石ヲ  
柴ニ賜フ

二十九日 武瓦深谷ノ城主松平源七郎康直  
卒ス享年二十五迄ナシ女子二人アリテ男子ナ



之依之及年公子上總康直輝主ヲ以テ名沃ノ家  
督トナシ玉フ此康直カ父上野外康忠入道玄舟  
八天正十六戊子以来致仕シテ洛陽ニ寓居シ今  
以存命ト云ク康忠入道元和四年八月十日  
七十二歳ニシテ洛ニ於テ没ス

十一月大

甲陽ノ旧臣高尾惣兵衛嘉文召出サレ

十二月小

大久保治ア太輔忠隣台従公ノ将トナレ既  
ニ天正中ヨリ奉行職ニ列スル処ナリ後相摸  
守ト改

是年妙壽院惺窩東武ニ下向ス是去年 神君  
名古屋ニテ聖学ノ大要ヲ同セ玉ヒ類リニ下向  
アルキ由 釣命アルカユハナリ則貞觀政要  
ヲ講述スルコト翌年ニ至ル

喜連川左兵衛督国朝肥前名古屋ニ赴ク路次  
藝凡ニ病死ス

信雄ノ功臣久保勘次郎勝正ヲ郎家人ニ列シ  
上総大和田村七百石ヲ賜フ又三雲新左衛門成  
持初ハ信雄ニ仕ヘ天正十三乙酉年以來蒲生氏  
ハカ家ニ寓居ス是成持カ妻ハ氏卿カ叔母タレ



ユハナリ豊人 神君御家人ト成

秀吉ノ命ニ依テ洛陽盜賊ノ張本石川五右衛門  
門兵其子伴類トモニ十一人七条河原ニ於テ釜  
煎ノ極刑ニ処セラル彼者朔望等ニ大小名廢士  
郡叅ノ日混雜シ大坂襲取ノ營中ニ紛レ入諸席  
ニ指重重代ノ宝刀或ハ銳利ノ良刀ヲ以テ巴カ  
鉦刀ニ代テ是ヲ帶シ退キ出ルユハ心ナラス情  
弱ノ汚名ヲ蒙アリ牙ヲ噬テ憤ル族余多ナリ淺  
野左京大夫幸長考ヘ量リ玄園ニ於テ刀ヲ從者  
ニ渡シ是ヲ持セ至短刀計ヲ帶シテ營内ニ登ル

衆人其才智ヲ嘆悦シ是ニ依テ皆刀ヲ家從ニ持  
セケレハ石川盜ノ一計絶テ此後營中ニ紛レ入  
コトナシ是ヨリシテ士風ト成悉ク營中去園ノ  
上ハ刀ヲ帶セス

保科敬前守正直カ糧子甚四節正光從五位下  
ニ叙シ肥後守ニ任ス其祖父彈正正後或ハ正清衰老  
シテ正直カ許ニ塾居シケルカ今年八十三共ニ  
メ没ス是甲陽ノ銳士鎗彈正ナリ



Vertical columns of handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), likely bleed-through from the reverse side of the page.





